

正論

東京外大教授 中嶋 嶺雄

中台接近に頭越される恐れ

中台間の電話に盗聴なし
去る三月上旬にカナダの首都オタワのカールトン大学で開かれた「東アジアの政治改革」と題する国際セミナーに招かれた。私は基調講演と座長の役をつとめたのだが、今日、中国やソ連で政治改革が日程のほり、台湾や韓国の民主化がすすみ、また、わが国ではリクルート疑惑が

国にも立ち寄った。台北滞在は、日台間の新しい知的交流の場としてきたる六月下旬に台北で開かれる

発端の「政治改革」が論議されていた折だけに、参加者の討論も白熱したものであった。
カナダは、中国と貿易面でも強い結びつきがあるけれど、アジア・太平洋国家として、台湾の最近の自覚ましい経済発展にも強い関心を寄せ、近々領事関係を含む事務機関が加・台間で再発足することになっている。
私はカナダ訪問の直前に台湾と米

さなハプニングに出あった。私が台北市内のホテルに着き、部屋に入った途端に電話のベルが鳴っている。受話器をとると、それは、私のゼミナール出身の教え子で、現在、日本のある新聞社の北京特派員である人

の「中国台北」ではなく「中華台北」と呼称が決まったのは、五月四日から北京で開かれるアジア開発銀行(ADB)の総会に郭婉容・財政部長を団長とする代表団を派遣する

に、「三不政策」を原則として堅持しつつ、まさに中国的な意味での柔軟性(「靈活性」と中国語では言う)によって、国際社会の一員として諸外国との実質的な関係を発展させようとする政策が最近のいわゆる「弾性外交」として進展しつつあるのだ。それは去る三月下旬から四月上旬に開かれた全国人民代表大会(第七期第二次会議)に見られる中

君からの電話であったが、彼は私用で私を探して北京から台北へ電話したと云々、そのままつながったのであった。
たまたまプッシュミ米大統領訪中直後であったので、米中首脳会談の模様や反体制学者・方励之夫妻招待事件(プッシュミ大統領が晩さん会に招待し、中国当局に阻止された事件)などにも話が及んだが、北京から東京にかかる電話にありがちな「盗聴音」らしい雑音も入るとなく、通話はきわめて順調で、北京と台北の近さを改めて認識したのであった。



この三月六日に総統就任以来初めて、そして台北政権下では一九四九年以来、三回目の総統公式外国訪問としてシンガポールを訪れた李総統を、シンガポール側は「中華民国總統」とは紹介せず、「台湾からきた総統」(President from Taiwan)と呼んだ。にもかかわらず、李総統があえてそれを甘受したのは、そのような形式に「たわらなくでもよくなりつつある台湾の国際的地位の向上と、そのことが「一つの中国」の立場に抵触するものではない」という長期的ビジョンのゆえである。このような寛容さを国際社会は注視し、また、中国側も評価したのと思われる。

「アジア・オープン・フォーラム」第一回会議の打ち合わせのためであったが、台北到着早々に興味深い小

「北京と台北の近さ」と言えば、きたる四月二十一日から北京で開かれるアジア・ジュニア体操選手権大会に台湾チームが「中華台北」の名称で参加することが決まった。従来

国側の譲歩だとも伝えられている。いずれにせよ、李登輝体制下の新生台湾におけるスターの一人、郭女史の公式訪中は中台関係史上きわめて注目すべき出来事になるであろう。しかし、これら二連の進展をもって、台北側のいわゆる「三不政策」(中

ひるがえって、わが国は、一九七二年の日中国交、日台断交当時の枠組みだけで今日も中国をめぐる国際関係に対応しようとしており、依然として「対中国、位負け、外交」をくりかえしている。
このような硬直した対応では、米中接近、米ソ接近、中ソ接近に次いで、今度は「中台接近」によって頭越されることにもなりかねないではないか。(なかじま・みねお)